

訓 辞

—平成二十八年度卒業式—

啓蟄の季節を迎え、春の息吹に草木も芽吹く好季の、今日の良き日に、日本体育大学同窓会 会長 瀧澤康二 様、日本体育大学名誉教授 池田敬子 様、そして、学校法人日本体育大学理事の皆様方 等のご来臨を賜り、平成二十八年度の学位記授与・卒業式を執り行うことができますことは、無情の慶びであり、本学及び卒業生にとって「光栄」とするところであります。ここに謹んでお礼申し上げます。

卒業生の皆さん！ ご両親・保護者・ご家族の皆様、本日は誠に
おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

いま、日本の社会は大きく揺らいでおります。伝統社会のぬくもりが希薄になり、地方、都市を問わず人々はつながりを生きることが難しくなってきました。地方は過疎化し、「伝統的公共」はすたれ、また都市においても町内会的公共は崩壊しています。そのため、国は「新しい公共」の形成をはかるための手段としてスポーツに着目し、健常者・障害者を問わず、老若男女が集うことのできる総合型地域スポーツクラブの結成を推奨して、これを「スポーツ立国戦略」と銘打った政策の中に取り込んでいます。

平成二十三年六月に『スポーツ基本法』が制定され、八月から施行されました。これによって、「新しい公共」創りは本格化することとなりました。この法律はスポーツに関する憲法のようなものですが、これによって私たち国民一人一人が、そして健常者も障害者も、老若男女も、等しくスポーツを行ったり、観戦したり、支えたりする権利を手に入れました。

本学の設置者である学校法人日本体育大学は、現在、地方の自治体とスポーツ及び健康に関する包括的連携協定を締結し、地方の活性

化に協力する事業を開始しておりますが、本学はこの一大事業に積極的に協力してまいります。皆さんにはそれぞれ故郷に帰って卒業生としてこの事業に参画されることを期待いたします。

いっぽう、体育及びスポーツの現場において指導者の在り方がいまほど問われている時代（とき）はありません。スポーツ界における体罰問題が大きな社会問題になっているからです。四年前、皆さんの入学式の折に私は体罰・暴力・パワーハラスメントなどはいかなる事情があつても行使してはならないこと、それを容認する考えをもっているなら、卒業までの四年間のうちに、この大学に置き去りにして巣立つて欲しいと訴えました。自らが犯した行為の結果は、必ず自らに返つてきます。その責任は自分自身がとらねばなりません。どんな状況におかれようとも、自らを律して事に処してくれることを願っています。いつも穏やかな笑顔をもつて選手に接し、優しく説き、諭すように心がけて下さい。

七十二年前の今日、東京大空襲がありました。一夜にして、十万五千余の人命が奪われました。その東京で十九年後の一九六四年の十月に「平和の祭典」である「オリンピックとパラリンピック」が開

催され、戦後復興を果たした「平和な国・日本」の姿が全世界に発信されました。それから五十六年後の二〇二〇年に成熟した世界都市・東京で再びオリンピックとパラリンピックが開催されます。本学はこの世界の祝祭に積極的にかかわってまいります。本学は建学の精神から導かれた社会的使命の一つとして、「わが国のスポーツ文化の深化・発展に努めるとともに、オリンピックムーブメントを主導的に推進し、スポーツの「力」を基軸に、国際平和の実現に寄与する。」と掲げているためです。いうまでもありませんが、オリンピックの最も大切な理念は「平和な国際社会（世界平和）の樹立」です。この理念が提唱されてから、一二三年もの時間（とき）が流れましたが、未だに世界各地で紛争は絶えず、戦禍は避けようもなく、今も続いています。

本学は世界平和を願うスポーツ界の雄 IOC のトーマス・バッハ会長に、昨年十月二十一日、「日本体育大学名誉博士」の称号を授与しました。バッハ会長は政治によるオリンピックへの不介入の原則を貫き、二〇一四年二月のソチ冬季オリンピックの開会式でこう訴えました。「世界のリーダーに言いたい。選手は国の最高の親善大使だ。オリンピックが発する友好や平和のメッセージを尊重してほしい。」

〔毎日新聞・夕刊〕二〇一四年二月八日、小坂大〕と。さらにまた、二〇一六年八月のリオ・オリンピックの開会式において、オリンピックの意義は政治や人種、宗教の壁を越えて大会中、選手村で同じ屋根の下で過ごし、互いを認め合うことにある点を改めて訴えるときともに、難民選手団を結成して世界の難民に希望のメッセージを送っています（『毎日新聞』二〇一六年八月七日、藤野智成）。

いまこそオリンピックの理念を世界中に浸透させなければなりません。人種の違い、民族の違い、宗教の違い、イデオロギーの違い。これら乗り越えるには、そのような違いに対して偏見を持たないことです。差異（ちがひ）がわかる世界を発見することです。スポーツの「力」を信じて、「平和」がやってくるのを待つのではなく、スポーツの「力」を信じて積極的に活動して「平和」を呼び込むことが大切です。

本学は二〇一二年度から朝鮮体育大学とスポーツ交流協定に基づいて、交流試合を行い、選手たちに「平和の使者」として、また「国際親善大使」としての役割を担ってもらいました。これは二〇二〇年の「平和の祭典」を主催するホスト国の仕事の一環であり、「平和」

を積極的に引き寄せようとした行為・行動であることはいうまでもありません。昨年、アメリカのオバマ大統領が広島平和公園を訪れ、慰霊碑に詣で、自身が折った「折り鶴」を原爆資料館に贈ったことは記憶に新しいところですが、今度は「原爆の子」のモデルになった佐々木貞子さんが折った「折り鶴」が海を渡ってアメリカの空軍基地の跡地に建てられた博物館に今年の八月六日、寄贈されます。これは世界平和の道を切り開くための出来事であり、感動せずにはおれません。皆さんはその平和公園の入り口にひっそりとたたずんでいる記念碑をご存じでしょうか。そこにはこう刻まれています。「世界平和は努力しなければ達成できるものではない。目標を明確に定め責任ある行動をとることこそ人類に課せられた責務である。」と。これは原爆の悲惨さを訴え、被爆者に最新の渡米治療の道を開き、将来に対する希望と自信を与えたノーマン・カズンズ氏の言葉です。一九六四年の東京オリンピックの年に、広島市より特別名誉市民の称号が与えられました。このことをスポーツマンとして皆さん自身の脳裏に深く刻みつつ、世界平和のための一步を踏み出して欲しいと思います。

昨年八月、障害者スポーツの世界的祭典として開催されたりオ・パ

ラリンピックにおいて、辻沙絵選手は四〇〇メートル走で銅メダルを手中にしました。これによつて国内では障害者スポーツがクロージアアップされましたが、国民一人一人が「こころのバリアフリー化」を図ること、すなわち「内なる差別をみつけていくこと」（「朝日新聞」二〇一七年三月八日）の大切さを、「実感」させられています。

日体大は健常者だけでなく、障害者のための体育・スポーツに関する教育と研究を共に推進する方向へと舵を切る機会を得ました。本学は脳性麻痺で車椅子生活を送っておられる東京大学准教授の熊谷進一郎先生が提唱する「障害の有無を越え、全ての人たちがたくさんの相手に頼れる社会」すなわち「ありのまま頼りあえる社会」（障害者が狙われて、「朝日新聞」二〇一七年二月二十五日）を、スポーツを通して創造していきます。

「日体大ここにあり」とその偉器を誇示してくれた卒業生の皆さんはアスリートとして活躍した選手以外にもたくさんおります。災害ボランティア活動に参加した皆さん、社会貢献推進事業に積極的に協力した皆さん、等々です。皆さんの献身的な活躍に敬意と感謝を申し上げますねばなりません。

卒業生の皆さんに申し上げます。皆さんは本日よりそれぞれ立場を異にしますが、日本体育大学の同窓生として誇りを持って、輝かしい未来を切り拓いて下さい。皆さんとともに、日体大は世界に誇りうる「福祉社会」をさらなる高みへと押し上げていくべく精進してまいります。

最後に、改めて皆さんのご卒業を祝福し、皆さんが獅子奮迅（ししふんじん）の力を顕示すべく、「青雲の志」をもって、積極果敢に、社会に挑戦し、さらに大きく飛躍するよう念願して、訓辞といたします。

平成二十九年三月十日

日本体育大学長

谷釜 了正